

ラベック姉妹 / 愛のラグタイム

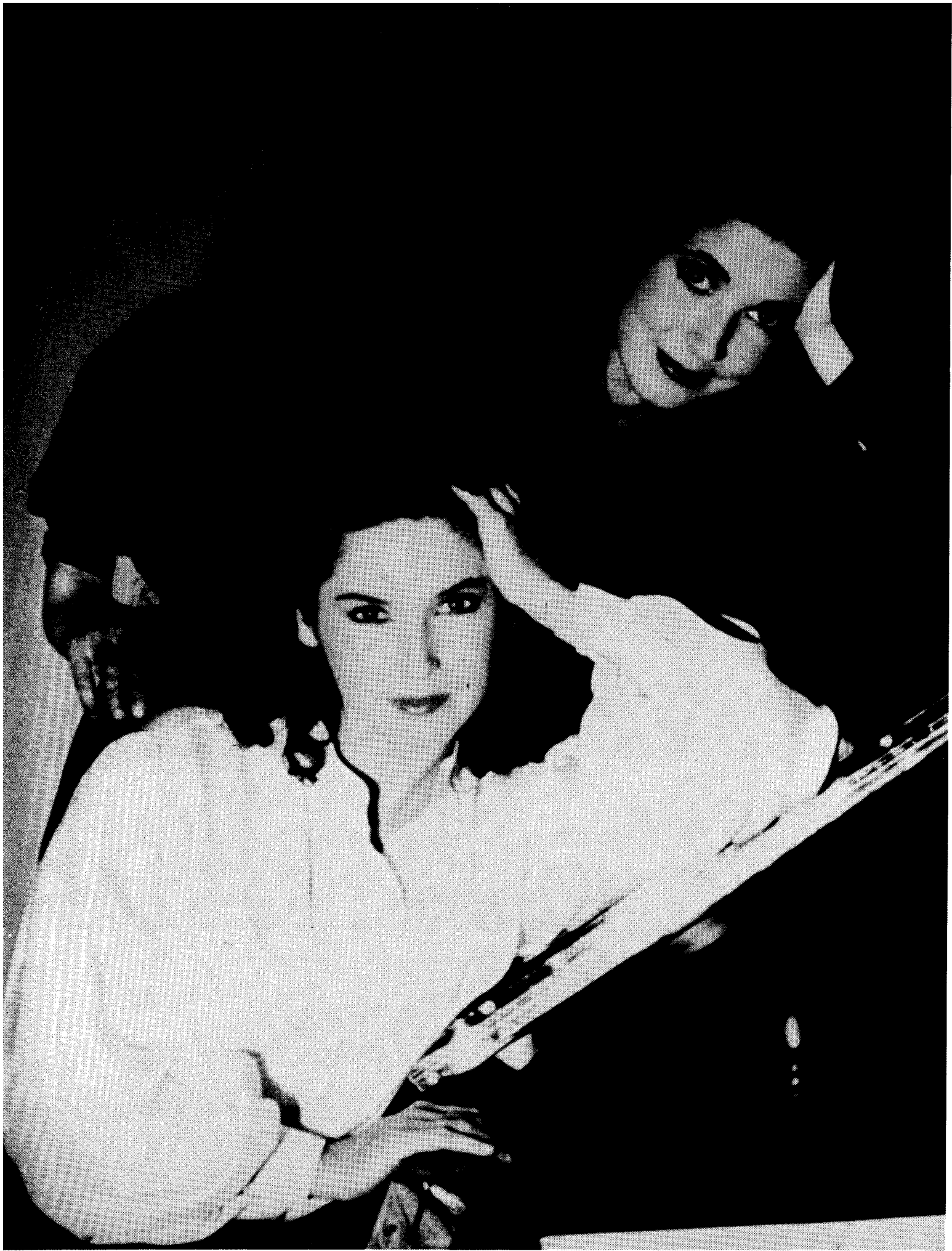
"GLADRAGS" / KATIA & MARIELLE LABÈQUE



CONTENTS

●使用レコードの紹介	3
●ラベック姉妹★プロフィール	6
●ラグタイムとラベック姉妹(安田文男)	8
●演奏アドバイス	12
ホンキー・トンク ● HONKY-TONK	14
ジ・エンターテイナー ● THE ENTERTAINER	27
アントワネット ● ANTOINETTE	40
マグネティック・ラグ ● MAGNETIC RAG	46
メイプル・リーフ・ラグ ● MAPLE LEAF LAG	59
ストレーニュアス・ライフ ● STRENUOUS LIFE	72
ストップ・タイム ● STOP TIME	81

(注)LP『愛のラグタイム』収録曲中「リアルト・リブルズ」「キャロライナ・シャウト」「エリート・シンコペーションズ」「ベシーナ」は、著作権他の都合により本書には収録されておりません。ご了承下さい。



使用レコードの紹介

ラベック姉妹／愛のラグタイム

“GLADRAGS”/KATIA & MARIELLE LABÈQUE 東芝EMI(株) ● EAC 90151



収録曲

- A-1) ホンキー・トック
- 2) ジ・エンターテイナー
- 3) リアルト・リプルズ
- 4) アントワネット
- 5) マグネティック・ラグ
- 6) キャロライナ・シャウト
- B-1) メイプル・リーフ・ラグ
- 2) エリート・シンコペーションズ
- 3) ストレーニュアス・ライフ
- 4) ストップ・タイム
- 5) ベシーナ

- 演 奏：カティア&マリエル・ラベック
- 編 曲：フランソワ・ジャノー
- プロデューサー：ジョン・マクラフリン

■ラベック姉妹のEMIにおけるデビュー・アルバム。ジャズ・ミュージシャンとして有名なジョン・マクラフリンのプロデュースにより、1982年10月、パリで録音された。このアルバムに収録された全曲は、ラベック姉妹のために、やはり優秀なジャズ・ピアニストであるフランソワ・ジャノーが2台のピアノのために編曲したものです。







ラベック姉妹★プロフィール

生年月日は公表されていませんが、姉のカティアと妹のマリエルは、2才違いと言われていました。

姉妹は、フランス大西洋岸に生まれ、ピアノ教師として知られていた母親から最初のピアノ・レッスンを受けてきました。その後、パリ・コンセルヴァトワールに進み、同じ年に二人揃って優等賞を獲得しています。

コンセルヴァトワールを終え、メシアン、ブーレーズ、ベリオ等現代音楽を代表する作曲家達に出会ってからは、そのレパートリーは、クラシックからガーシュイン、スコット・ジョプリン、リゲティと、広がっていきました。

二人は早くからデュオを組み、ヨーロッパはもとより合衆国、中東諸国、オーストラリアまでツアーを行なっています。北米大陸では、ズビン・メータ、マイケル・ティルソン・トーマスの指揮によるロサンゼルス・フィルハーモニー、シャルル・デュトワの指揮によるモントリオール・シンフォニーをバックに演奏。イギリスでは、BBCで録音し、ロンドンの大きなコンサート・ホール出演。'82年にはロンドンにあるロイヤル・アルバート・ホールの“プロムナード”コンサートに初出演、その模様はBBCラジオ／テレビで全国に放送されました。また、エジンバラ音楽祭にもデビュー、それが大変好評だったため、翌年のエジンバラでは、3つのコンサートに再び招かれています。さらに、ジャズに関心の高かった二人は、ジャズ・ギタリストとして著名なジョン・マクラフリンとともに、合衆国各地でコンサートを行なっています。

'82年から'83年は、エヴァリー・フィッシャー・ホールでの初のニューヨーク・リサイタル、ピンカス・ズッカーマン指揮のセント・ポール室内管弦楽団とのカーネギー・ホール初出演、ロサンゼルス・フィルハーモニー、ロイヤル・フィルハーモニー、イスラエル・フィルハーモニー、パリ管弦楽団との共演、ジュネーヴ、パリ、ロンドン等ヨーロッパ大都市でのリサイタルと、その活躍は大変に華々しいものでした。オランダ、イギリス、ベルギー、西ドイツ、フランス等では、テレビにゲスト出演もし、各地に熱狂的なファンを得ています。'83年の9月から10月にかけては初の来日コンサート、11月にはイスラエル、'84年2月～3月はオーストラリア、ニュージーランドと、精力的な活動を続けています。

ラグタイムとラベック姉妹

●安田文男

1953年東京生まれ。ピアニスト。ジャズを中心に幅広いジャンルで活躍中。

昔からよく知られているピアノ・デュオとして、ウィーンのバドゥラ・スコダとデームスのチームや、ドイツのコンタルスキー兄弟がありますが、今ヨーロッパ、アメリカ、日本を中心に爆発的に人気を呼んでいるチームが、フランスのラベック姉妹です。テレビのCMなどで御覧になった方も多いたと思いますが、2人とも美貌に恵まれ、軽妙洒脱、感性に富んだ演奏ぶりは、ポピュラー、クラシックを問わず、それぞれのファンを魅了しているよう

です。彼女達は、最初は現代音楽の演奏家として出発し、1981年には、ガーシュウインの「ラブソフィー・イン・ブルー」をレコーディングしています。この曲集は、EMI デビュー・アルバム「愛のラグタイム」の中から7曲を収録したもので、レコード・タイトルが示すように、主にスコット・ジョプリンのラグタイムを中心に、それを2台のピアノにアレンジしてあります。

ラグタイムは、ジャズ・ピアノの原型

この曲集の中の2番目の曲、「エンターテイナー」をちょっと軽く弾いてみて下さい。おそらくこの曲を知らない人はいないと思うのですが、これは「スティングのテーマ」として日本でもよく知られた曲です。この曲が発表されたのが1902年(日本でいえば明治35年)、ざっと83年前のことです。当時、アメリカの流行音楽の最先端に位置していたものにラグタイムという音楽がありました。この曲の作曲者スコット・ジョプリン(1868~1917)は、その代表的な作曲家です。さて、弾いてみておわかりのとおり、この曲の中には、やさしさ、ウィット、気軽さ、人々の心をなごませる要素が溢れています。一杯の酒と共にこれらラグタイムを聴きながら、当時の黒人達は1日の疲れを癒し、明日への希望、活力をつちかったのです。

スコット・ジョプリンは、今日でも非常に有名なラグタイムの作曲家ですが、当時、その他にもブラン・キャンベル(ザ・ラグタイム・キッド)とか、パーシー・ウェンリッチ(ザ・ジョプリン・キッド)など、いろいろなラグタイム・ピアニスト達がありました。カッコの中は、彼等のあだ名です。彼等の中のある者は、南部からニューヨークに流れていき(ジャズの発祥の地はアメリカ南部)、ラグタイムを彼の地に伝えました。ジャズ・ピアノのルーツがここにあるわけです。

さて、この新しい音楽にすっかり魅了されたニューヨ

ークの何人かのピアニスト達、ユービー・ブレイク、ジェームス・P・ジョンソン、デューク・エリントン、ウィリー「ライオン」スミス等は、互いに競い合いながらピアノの腕を磨いていました。彼等は、相手の音楽上のアイデアを刺激剤としながら、個々の独自の音楽を発展させ、又、ピアノ・テクニク的にも、かなり高度なものを持っていました。こうしたピアニスト同志による切磋琢磨の成果が積み重なって、ひとつのピアノ・スタイルができていったのです。これが、ハーレム・スタイル、又はストライド奏法と呼ばれるものです。(ストライドとは「またぐ」という意)。これは、当時、シカゴを中心に隆盛を極めたブギウギと並ぶ代表的なジャズ・ピアノ奏法で、ラグタイムの影響を全面的に負っています。この奏法で演奏された前述のピアニスト達の記録のいくつかは、現在でもSPレコードから復刻され入手することができるので、是非聴いてみて下さい。又、この奏法は、現在のトップ・キーボーディスト達、キース・ジャレット、リチャード・ティー、ジョー・サンプル等にも多大な影響を与えており、何年か前のチック・コリア、ハービー・ハンコックのピアノ・デュオのコンサートでは、1曲このスタイルで弾かれたものもあります。この曲集の中では、「ホンキー・トック」が、ストライド・スタイルの味わいを色濃く持っています。

ラグタイムの構造

南北戦争後何年かのち、ニューオリンズなどでは、黒人達の伝承的音楽とヨーロッパ音楽が混交しており、この中からヨーロッパとアフリカの初めての音楽的配合として、ラグタイムが生まれました。即ち、マーチのリズムにのり(2ビート)、様々なコード・パターンの上にシンコペーションを伴ったメロディーが流れるというものです。形式的には、ロンド形式(A-B-A-C-D)のような形で進行するものが多く、いわゆるジャズと違う点は、それが楽譜に書かれた音楽であるということです。しかし、当時の正規な音楽教育を受けていない黒人の多くは、ラグタイム・キッドとして放浪の旅を送ったわけ

で、彼等ラグタイム・ピアニスト達の演奏は、おそらく大分即興性に富んだものであったろうと想像されます。クラシックと違い、演奏者の即興性をその時々感情の中で自由に生かせるというのが、ラグタイムからジャズに至る最大の魅力というわけで、逆に言えば、1つの曲をどう料理しようが自由なわけです。ここで、様々なラグタイムの中の最大公約数的なパターンを、簡単に分析するのも無駄ではないでしょう。

さて、よく使われるラグタイムの基本コード進行は16小節をひと区切りにしたものです(この曲集の中では、「ストレーニュアス・ライフ」がこの進行に近い)。

The image displays four musical staves, each representing a 16-measure chord progression. The chords are written above the staves and are divided into four measures by vertical bar lines.

- Staff 1: Measure 1: C; Measure 2: C; Measure 3: F; Measure 4: C.
- Staff 2: Measure 1: C; Measure 2: C; Measure 3: C^{#dim}; Measure 4: G(onD), D7, G, G7.
- Staff 3: Measure 1: C; Measure 2: C; Measure 3: F, F^{#dim}; Measure 4: C, C7.
- Staff 4: Measure 1: F, F^{#dim}; Measure 2: C, A7; Measure 3: D7, G7; Measure 4: C.

次に、このコード・ネームどおりに、音を重ねていくわけですが、連結する際に、それぞれの和音が最もよく

響くポジションに置かれるように注意する必要があります。

C C F C
 C C C#dim G(onD) D7 G
 C C F F#dim C C7
 F F#dim C(onG) A7 D7 G7 C

これが、ラグタイムの基本的な骨組みですが、この形が基になって左手のパターンが作られています。

C C F C
 C C C#dim G(onD) D7 G G7
 F F#dim C(onG) A7 D7 G7 C

これがラグタイムの一般的な左手の形です。使っている音は単純ですが、これから後のストライド奏法、スイング・スタイルにつながる重要な形なのです。この左手の形の上に、いろいろなメロディーやバリエーションを繰り広げていくわけです。

さて、これから発展していったストライド・スタイルとはどのようなものだったのでしょうか。このラベック姉妹の用いている編曲の中にも、その語法を用いているものが少なくありません。一言でいってラグタイムとの違いは、それがまったく即興に基づいたものであるとい

うことです。そのため、必然的に個々の演奏者独自の個性やテクニックに重点がおかれました。昔のクラシックの作曲家達(ベートーベン、モーツァルト、ショパン等)が、皆、即興演奏の大家であったように、彼等ジェームス・P・ジョンソン、ファッツ・ウォーラー、アート・テイタム等もそれぞれ高度なテクニックを持ち、即興演奏の達人であったわけです。若い頃のホロヴィッツなどは、アート・テイタムの大ファンであったそうです。両者の間には、音楽性とテクニックという面で、共通する高さがあったのです。

ラベック姉妹の世界(パラフレーズ・連弾)

このラベック姉妹の用いている編曲は、華麗なパッセージを多用した楽しいものですが、実は、こういう形はパラフレーズとって、クラシックの世界ではリストを始めとして、かなり以前から行なわれていたものです。19世紀後半から今世紀初頭にかけて活躍した大ピアニスト達は、アンコール・ピース用として、必ず何曲かはこうした華麗なパラフレーズ曲を持っていました。リストの「リゴレット・パラフレーズ」、ラフマニノフが編曲した「愛の喜び」、シュルツ・エヴラー編曲の「美しく青きドナウ」、モーリッツ・ローゼンタールの「ウィーンのカーニバル」(これはヨハン・シュトラウスのワルツをもとにしたもの)などは有名なものです。ブラームスなどもウィнна・ワルツを即興的にパラフレーズして演奏したこともあったようであり、1つの曲を素材にしてさまざまなバリエーションを行なっていくという点で、ジャズと共

通する面白味がそこにはあります。又、もっと以前、モーツァルトやシューベルトの時代には、家庭の中での音楽の最もポピュラーな形態として「連弾」があり、それは今日のようにレコード・テープのない時代に、音楽を一般的なものにする大きな力でした。何故かという、それは交響曲でも、ダンス・ミュージックでも、1人で弾けないものが2人で弾くことによって可能となり、しかも1人で弾く時と違いアンサンブルの楽しみも味えたからです。要するに、ただ受身で音楽を聴くのではなく、自ら音楽を作る楽しみを当時の人々はしていたわけです。

さて、20世紀も後半の現在、もっとも人々が見直してもいいジャンルが「連弾」「ピアノ・デュオ」であり、又、先に述べたようなパラフレーズの面白さ、そしてラグタイムの楽しさを加味して、このラベック姉妹の曲集を楽しんで弾かれることをおすすめします。

アントワネット ● ANTOINETTE

まるでシューマンのピアノ曲のような感じで始まるこの曲は、ジョプリンが1906年に書いた3拍子の伝統的なマーチです。しかし、このラベック姉妹の演奏はゆるやかな、クラシカルな感

じになっています。テクニ的に難しいところはほとんどありません。ただ、よくメロディーを歌わせて、全体的にはデリケートに演奏して下さい。

マグネティック・ラグ ● MAGNETIC RAG

この曲は、スコット・ジョプリン晩年の1914の作品で、たいへんに落ちついた、ビューティフルな曲です。

㊦㊦のテーマは、やさしい音色で優雅に弾きます。第1ピアノの右手と左手が対位的にからんでいる箇所は、充分そのおもしろさを出して下さい。㊦では、キイがGマイナーに転調しています。決然とした感じで弾くこと。㊦の部分はすこしブギウギの感じがしています。第1ピアノの最初の左手は、譜例のようなフィーリングで弾くのもおもしろいと思います。

Ex.3



㊦の第1ピアノのパートは少し難しいですが、繊細に弾いて下さい。㊦ではクラシカルな雰囲気の中に気品をもって弾いて下さい。

メイプル・リーフ・ラグ ● MAPLE LEAF LAG

この曲は、「ジ・エンターテイナー」となると最も有名なジョプリンのラグタイムです。1899年、ジョプリンの理解者であったジョーゼフ・スタークにより出版され、彼はこれによって「キング・オブ・ラグタイム」の名声を得ました。さて、このラベック姉妹の演奏では、原曲のよさを生かしながら、燦然たるテクニックを縦横無尽にくりひろげて目もさめるような効果をあげています。このLP『愛のラグタイム』の中では難曲のひとつ

つです。

演奏にあたっては、まず遅くてもよいから必ずテンポをキープすること。ことに細かいパッセージの部分は、体の中で大きなタイムでとらえ決してはしらないで下さい。

全体的につよいタッチでキビキビと弾くように注意します。ピアノ・コンサートのアンコールに最適な曲です。

ストレーニュアス・ライフ ● STRENUOUS LIFE

1902年に書かれたこの曲は、この曲集の中では編曲もさほど難しくなく、曲想も平易であり、気軽にラグタイムの楽しさを味わっていただけたらと思います。

最初の㊦㊦に何回も出てくるメロディーは、毎回同じ調子で弾くのではなく、強弱、タッチに変化をつけて下さい。㊦の部

分は、第1ピアノの左手の対旋律を味わい深く演奏します。右手と左手のタッチの色を変えると、ぐっと音楽に奥行きがでてくるはずですが、㊦の部分はひそやかに、第1ピアノは決してリズムがつかまらないように注意します。第2ピアノがそれをそっと支えます。㊦からは豪華に雄々しく弾いて下さい。

ストップ・タイム ● STOP TIME

1910年に作曲されたこの曲は、「ストップ・タイム・ラグ」ともいい、本来はストップ(stamp)といって、演奏者も聴いている人々も床を踏みならして音楽に参加する形のものでした。

㊦～㊦の間に何回も出てくる2つのアクセントのついたコードは、エキセントリックに強く弾きます。この時、決してリズムがつかまざらないように。休符も必ずテンポの中でキープしま

す。㊦～㊦は、今までのぎくしゃくしたリズムから解放されてのびのびと弾きます。㊦にはシンコペーションされたリズムのおもしろさを出して下さい。㊦からの第1ピアノの左手の形は、古くはブギ・ウギ奏法、現在もリチャード・ティー等によってしばしば使われるものです。心の中で弱拍を意識して演奏します。